

# リーダーシップ研究のパラダイムと社会物質性アプローチの可能性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 真一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/21801">http://hdl.handle.net/10291/21801</a>

# 2020年度 経営学研究科

## 博士学位請求論文（要旨）

### リーダーシップ研究のパラダイムと社会物質性アプローチの可能性 Paradigms of Leadership Studies and Possibility of Sociomaterial Approach

経営学専攻  
伊藤 真一

#### 1 問題意識と目的

これまでのリーダーシップ研究は、機能主義と社会構成主義に立脚して研究が行われてきたが、近年、新たな研究アプローチに基づき、物質性に注目するリーダーシップ研究が散見されるようになってきている。本論では、物質性に注目するリーダーシップ研究の特徴を明確化し、物質性に注目する研究をさらに発展させるために必要な研究アプローチについて検討する。このために、本論はリーダーシップ研究を、機能主義、社会構成主義、物質性の3つの観点から捉え直し、それぞれのリーダーシップ研究の特徴を検討する。また、物質性に注目するリーダーシップ研究をさらに発展させるための方法論として、社会物質性アプローチの可能性を検討しつつ、今後の研究課題を明確化することを目的としている。

リーダーシップは2000年代前半まで、主に機能主義と社会構成主義の2つのパラダイムから研究がなされてきた。例えば機能主義に立脚する研究は、リーダーシップを客観的実在物として捉え、変数間の因果関係の解明を通してリーダーシップを研究してきた。具体的には、リーダー個人の特性や行動と組織の業績の関係性、あるいは特定の状況下におけるリーダーの行動と業績の関係性が検討されてきた。しかし、機能主義に立脚するリーダーシップ研究は、リーダーシップの受け手であるフォロワーの役割を過小評価しており、フォロワーの能動的な側面やリーダーとコミュニケーションをとりながら相互作用する側面などは捨象されてきた。

一方、1990年代以降は、社会構成主義に立脚する研究が台頭してきた。社会構成主義は、組織の現象を組織メンバーの間の相互作用を通して間主観的に構成されると捉える研究アプローチである。社会構成主義に立脚するリーダーシップ研究においては、リーダーシップをリーダーとフォロワーの相互作用の中で現れるものとして捉え、そのプロセスを研究する。リーダーとフォロワーの相互作用において、コミュニケーションは重要な要素であり、したがって、コミュニケーションにおいて主要な役割を果たす言語の役割が大きく注目された (Shamir, 2007)。こうした研究では、言葉が持つ、現実を形成する力 (formative power) に焦点を当てて分析を行う、組織ディスコース分析が研究手法として大きな位置を占めてきた (Fairhurst & Grant, 2010)。

社会構成主義に立脚するこれまでのリーダーシップ研究はリーダーシップの理解に大きな貢献をもたらしている。しかしながら、既存の社会構成主義に立脚するリーダーシップ研究には問題点も指摘されている。それは言語への過度な傾倒である。我々は日々多様なモノに囲まれて組織生活をしており、これらのモノは組織での活動に大きな影響をもたらしている。それにもかかわらず、モノが組織や組織生活に及ぼす影響はこれまで見逃されてきた。その理由は、従来の社会構成主義に立脚する研究が、社会生活における言語の重要性を過大評価し (Schatzki, 2002: 77)、モノを社会科学の議論から周縁化し、物質性を研究上の視点の外に追いやってしまったためである (Carlile et al, 2013: 2)。

こうした指摘を受けて 2005 年以降、物質性の観点からリーダーシップを検討する論文が見られるようになってきている。物質性に注目するリーダーシップ研究は、モノのエージェンシー、つまり、「人間の介入から独立して行為する、非人間の能力」(Leonardi, 2011: 148) に注目しつつ、物質性がリーダーシップにまつわる現象の構成にどのように関わるのかを明らかにしている。物質性に注目する研究はまだその数は多くないが、身体、物的配置、空間などに注目しながら、物質性がリーダーシップをいかに構成するのかが研究されている。

このように、既存のリーダーシップ研究は機能主義、社会構成主義の立場から研究が行われてきており、近年は物質性への注目が集まっているが、これまでのところ、これらの立場からリーダーシップ研究の目的やリーダーシップの存在論、鍵概念や研究方法などをまとめて検討している研究はみられない。特に物質性に注目した研究に関しては物質性が注目されるに至った背景や、基本的な視点、研究のアプローチ、物質性に注目することがリーダーシップのどのような側面を明らかにするのかといったことについて先行研究をレビューしつつ体系的に論じた研究はみられない。したがって、本論はリーダーシップ研究を、機能主義、社会構成主義に加え物質性の観点から捉え直し、それぞれの研究群の特徴を捉える。そして、物質性に注目するリーダーシップ研究をさらに発展させるための研究アプローチとして社会物質性アプローチの可能性についても検討しつつ、社会物質性アプローチに立脚するリーダーシップ研究の具体的な研究課題を提示することを研究目的とした。

## 2 構成及び各章の要約

上記の目的を達成するために、本論は以下の構成に従い議論を展開した。第 1 章では、機能主義に立脚するリーダーシップ研究を概観した。はじめに特性アプローチ、行動アプローチ、コンティンジェンシー・アプローチといった古典的な議論を振り返った。そして、これらの研究がリーダー個人に注目し、フォロワーの認識やリーダーとの相互作用とリーダーシップとの関係は検討されてこなかったことを確認した。次に、1980 年代以降のリーダーシップ研究をレビューした。1980 年代以降の研究では、リーダーシップの受け手であるフォロワーの認識やリーダーとフォロワーの関係性、フォロワーの役割などとリーダーシップの関係について検討する研究が見られる。この章ではリーダーシップやリーダーのカリスマに対するフォロワーの認識を検討するカリスマ的・変革型リーダーシップ研究、リーダーとフォロワーの関係性に注目するリーダー・メンバー交換理論、フォロワーの役割に注目するフォロワーシップ理論を確認した。この章の最後では、機能主義に立脚するリーダーシップ研究の問題として、リーダーやフォロワーなどリーダーシップに関連するアクターの相互作用におけるダイナミックな側面が検討できない点、フォロワーをはじめとしたアクターの意味解釈や意味形成を見逃している点、リーダーやフォロワーの相互作用が展開される背後にある構造やコンテキストについて議論を展開できていない点を挙げ、機能主義的リーダーシップ研究に対する批判的な検討を行った。

第 2 章では社会構成主義に立脚するリーダーシップ研究についてレビューした。Meindl et al. (1985) が社会構成主義をリーダーシップに持ち込んで以降、リーダーシップを特定のコンテキストの中でリーダーとフォロワーの相互作用によって構成される現象として捉える研究が増加している。そこでこの章では、社会構成主義の基本的な考え方や、中心的な研究方法であるディスコース分析を確認した。そしてその上で社会構成主義に立脚するリーダーシップ研究をレビューした。そして社会構成主義的リーダーシップ研究の貢献と限界について論じた。

第 3 章では、物質性に注目するリーダーシップ研究について検討を行った。ここでは、はじめに経営組織論において物質性の問題が見逃されてきた理由やこれまでの組織研究において物質性がどのように扱われてきたのかを確認した。こうした前提を確認したのち、近年の物質性の議論を整理した。具体的には物質性とはどのような概念なのか、物質性のエージェンシーをどのように捉えるのか、そしてより最近注目されている社会物質性アプローチは組織現象をどのように捉えるのかなどを確認した。そして、物質性に注目する既存のリーダーシップ研究をレビューし、これまでどのようなことが明らかになってきたの

か、物質性に注目するリーダーシップ研究はリーダーシップをどのように捉える研究なのかを議論した。そのうえで、既存の研究は、モノそれ自体がリーダーシップにどのような影響を与えているかを検討しているに留まっており、社会的なものを含めた多様な存在の中でどのようにそのエージェンシーがもたらされるのかについては議論されていないことを指摘した。そこで、物質性に注目するリーダーシップ研究をさらに発展させるために、社会物質性アプローチに立脚したリーダーシップ研究を提案した。

そして第4章では、社会物質性アプローチに立脚するとどのようにリーダーシップを捉えることが可能になるのかを例示しつつ、今後の研究の課題を探るため、ケース分析をした。本論では、特定非営利活動法人シャプラニール=市民による海外協力の会（以下、シャプラニール）が行っているフェアトレードプロジェクト「She with Shapla Neer」を取り上げた。これは、過酷な生活を余儀なくされている途上国の女性を支援することを目的としたものである。このプロジェクトに参加しているのは、全体のコーディネーターなどを担当したシャプラニール、被支援者であり石けんの生産者であるバングラディッシュやネパールの女性たち、技術支援に携わった太陽油脂株式会社である。このケースは、ディスコースと物質性が結びついていくことにより製品である石けんの品質向上に向けたリーダーシップが発現した事例である。このケースを上記3つの視点から捉えたリーダーシップの例として例示した。

第5章では、第4章で例示したケースを、社会物質性アプローチに関連づけて議論した。ここでは、ケース分析をもとに、具体的な研究課題として、1. モノによってディスコースが回顧的に意味付けられたり、新たなディスコースの形成が促されたりする側面を捉える、2. 意味付けられ変化したディスコースによってモノも変化したり、新たな結びつきを見せたりする側面を検討する、3. リーダーシップをディスコースや物質性が順次結びついていくプロセスとして捉えるといった3つを提案した。

### 3 本論の貢献と課題

本論では、リーダーシップ研究を、機能主義、社会構成主義と新たな視点としての物質性の観点から捉え直し、物質性に注目する際のアプローチとして社会物質性アプローチの可能性を検討した。

本研究の貢献としては、1. リーダーシップ研究を機能主義、社会構成主義に加え、物質性の観点のアプローチから捉え直すことによってこれまでのリーダーシップ研究を新たな視点から整理した。2. 既存の研究では、物質性に注目するリーダーシップを体系的にまとめたものはほとんど見られなかった。本論は物質性に注目するリーダーシップ研究をレビューしその貢献と今後の課題を明確にした。3. 物質性に注目するリーダーシップ研究の具体的なアプローチとして社会物質性アプローチの可能性を検討した。また、ケース分析を通して、社会物質性アプローチに立脚するリーダーシップ研究の具体的な研究課題を明確にした。この3点が本論の主要な貢献であると思われる。

今後の課題として、本論で提示した3つの研究課題に取り組んでいく必要がある。その際には、ケーススタディ（e.g. Eisenhardt, 1989; Graser & Strauss, 1967; Yin, 1994）が適しているだろうと思われる。実際の現象を見ながら、物的なものと、社会的なものがどのように重なり合い、そこにエージェンシーが生まれ、リーダーシップに関連する現象がいかに構築されていくのか、また、このプロセスにおいて、他の概念がどのように関係してくるのかといったことを検討していくことが求められる。